

生徒のキャリア・進路観の醸成につながる デザイン思考を用いた「総合的な探究の時間」とは

総合型・学校推薦型選抜の拡大に伴い、学校現場では、「総合的な探究の時間」の中で、

思考力・判断力・表現力などの資質・能力を生徒に育むとともに、生徒のキャリア・進路観の醸成につなげようとする動きが顕著になっている。そこで今号では、生徒のキャリア・進路観の醸成につながる「総合的な探究の時間」の設計と指導のポイントについて、実践事例を基に考える。

実践事例

「自他のしあわせ」を探究する 「未来構想ゼミナール」で 自律的に進路を拓く力を育む 宮城県宮城野高校

デザイン思考で

「自他のしあわせ」を探究

宮城県宮城野高校では、普通科、総合学科、美術科の長所を融合し、前課程の「総合的な学習の時間」から探究学習に取り組んできた。そして2022年度の学科改編を機に、「総合的な探究の時間」を「未来構想ゼミナール」と名づけ、「自他のしあわせ」をキーワードとする問題解決型学習へ

学校概要

設立 1995（平成7）年

形態 全日制／普通科、美術科／共学

生徒数 1年次約240人

2022年度卒業生進路実績

国公立大は、山形大、東北大、宮城教育大、千葉大、金沢大、宮城大、東京都立大、長岡造形大などに71人が合格。私立大は、多摩美術大、中央大、明治大、早稲田大などに延べ361人が合格。

と発展。「探究の宮城野」を次代の学
校像として掲げ、進化を続けている。

未来構想ゼミナールは週1回、午後
の2コマ連続で実施されている。1年
次前期に、未来構想学概論という授業
で、問題解決に必要な「デザイン思考」
や「探究スキル」を習得する。そして
1年後期からは、興味がある学問に
ついて実験や文献調査を積み重ねなが
ら追究する「学問探究」や、フィール
ドワークやディスカッションを通して

社会課題の解決策を提案する「課題解
決」など、4つの系統のいずれかに所
属し、異年次混合で活動する（図1）。

「本校におけるデザイン思考は、問
題を解決し、『自他のしあわせ』を実
現するための工夫を考えることです。
生徒は、『わくわくするか？』『新しい
か？』『誰かの役に立つか？』の3つ
の問いのうち、少なくとも1つに該当
する企画を所属する系統で考え、その
実現に取り組みます」（丹羽裕教頭）

異年次混合で取り組む探究学習

図1 「総合的な探究の時間」の3年間の流れ

学年	取り組み
1年次（前期）	未来構想学概論 「デザイン思考」や「探究スキル」の習得
1年次（後期）探究Ⅰ 2年次（前期）探究Ⅱ 2年次（後期）探究Ⅲ 3年次（前期）探究Ⅳ	<p>未来構想ゼミナール（異年次混合） 4系統12程度のゼミナールのいずれかに所属 問題解決型の探究学習を実施</p> <p>※探究Ⅰ～Ⅳで行う内容や形式（異年次混合グループ探究か 個人探究か等）は、系統やゼミナールによって異なる</p> <p>学問探究 課題解決 実習・体験 表現・芸術</p>

※学校資料を基に編集部で作成。

生徒が、探究学習での成長を観点別に自己評価

69の評価項目から 自分の長所を見つける

1年次の前期、生徒は「『自他のしあわせ』とはどのような状態か」をテーマとしたグループワークを通じて、探究学習の素地を養う。

「LHRで学校行事を企画する際に『自他のしあわせ』を意識させることなどを通じて、1年次後期からの未来構想ゼミナールに必要なデザイン思考が実践的に生徒に身につきます」（1年次主任・若生啓太先生）

1年次は、後期からの未来構想ゼミナールで自分は4系統のどの系統に所属するのかを、8月に実施される上級生のゼミ活動の最終発表である「ゼミフェス」を参考に決定する。

「未来構想ゼミナールでは、探究のテーマはもちろん、探究の手法についても個別最適を目指しています。先輩の探究学習を参考に、自分はどんな課題に、どんな手法でアプローチしたいかを考え、それをゼミの志望理由書としてまとめ、所属する系統を決定します」（2年次主任・川崎浩介先生）

1年間のゼミナール活動では、3月に中間発表、8月に最終発表（ゼミフェス）が行われ、生徒は振り返りシート（図2）を使って自身の成長を自己評価する。シートには、観点別学習状況の評価の3観点を土台に、69の評価項目が記載されているため、生徒は多角的かつ詳細に自己評価を行うことができる。また、教師は同シートを、面談の際の声かけの材料にしている。

「生徒の探究学習はテーマも手法も多様ですから、私たち教師が生徒と丁寧に対話し、一人ひとりの生徒に、評価項目の中から自分の長所と言える項目を見つけさせます。そして、その後の探究学習を通してさらに伸ばしていきます」（教務部長・伊勢将聡先生）

探究学習での成長を生徒自身が分析

図2 探究学習の振り返りシート（抜粋）

評価力	課題の本質（キーワード）を見抜き、端的な表現で言い表すことができる。	① 探究活動の要点を理解した。 ② 探究活動の目的が明確である。 ③ 課題の本質を一言（端的な表現）で言い表すことができる。	④		
			④	⑤	⑥
4. 思考力	抽出・整理した情報について、それらの関係性（共通点・相違点）や傾向を見いだすことができる。	④ 複数の情報の関連性を見いだした。 ⑤ 共通点や相違点、因果関係などが明確な資料・データを見つけた。 ⑥ 複数の資料・データから導き出される傾向を明らかにした。 ⑦ 解決策を構想した。	④	⑤	⑥
			⑦	⑧	⑨

観点別学習状況の評価の3観点を土台に、69項目で自己評価する。思考力について自己評価する8項目（①から⑧）の一部を抜粋して掲載。振り返りシート全体は、ウェブサイト「VIEW next ONLINE」(https://view-next.benesse.jp/view/cat/bkn-hs/) からダウンロード可能。



※学校資料を抜粋して掲載。



校長 早坂重行
はやさか・しげゆき
同校に赴任して1年目。
国語科。博士（教育情報学）。



教頭 丹羽裕
たんば・ひろし
同校に赴任して15年目。
美術科。



研究企画部長 西澤硬
にしざわ・こう
同校に赴任して5年目。
理科（地学）。



進路指導部長 吉田明弘
よしだ・あきひろ
同校に赴任して5年目。
数学科。



未来構想委員会副委員長 小岩淳子
こいわ・じゅんこ
同校に赴任して9年目。
国語科。



3年次主任 郷右近貴之
ごうこん・たかゆき
同校に赴任して7年目。
国語科。



教務部長 伊勢将聡
いせ・まさとし
同校に赴任して11年目。
国語科。



2年次主任 川崎浩介
かわさき・こうすけ
同校に赴任して12年目。
地理歴史・公民科（日本史、歴史総合）。



1年次主任 若生啓太
わかう・けいた
同校に赴任して9年目。
数学科。

研修の充実とツールの共有で指導力を向上

探究学習のプロセスを

総合型・学校推薦型選抜に生かす

23年度大学入試では、同校の国立大学進学者の約3分の1が、総合型・学校推薦型選抜で合格したが、その多くが、探究学習での学びや成長をアピールして合格を勝ち取った。

総合型・学校推薦型選抜での受験を希望する生徒の面接・小論文指導には、全校体制で取り組む。毎年5月に、総合型・学校推薦型選抜に向けた生徒支援に関する校内研修を全教師参加で実施し、面接指導のポイントなどを共有。その上で、各生徒の志望分野に合わせて「担任＋教師2人」の3人体制で支援にあたる。生徒は面接指導に使用する個別指導評価票(図3)を持って、3人の担当教師の指導を受けるようにしており、学校全体で体系的に指導できるような仕組みを整えている。

「校内研修では、個別指導評価票を見ながら、生徒にどのような声かけをして、探究学習での気づきや志望理由

を引き出し、深掘りしていくかといった実践的な講習に加え、前年度に面接指導を受けた生徒の感想などを紹介することで、学校全体でスキル面とマインド面の目線合わせを行っています」(進路指導部長・吉田明弘先生)

中でも、志望者の多い地元国立大学の志望理由書指導については、過去の生徒が探究学習と進路とのつながりを深めていった様子を共有するなど、力を入れている。

探究学習を進路につなげるために、校外との交流も大切にしている。

「未来構想ゼミナールの中間・最終発表には、県内の他校の生徒を積極的に招いています。生徒は、同年代の生徒から質問を受けたり、彼らと交流したりすることで刺激をもらい、探究学習への取り組みとキャリア・進路観の醸成の両面で大きな影響を受けます。探究学習ではできるだけ多様な人との出会いの機会を生徒に与えたいと思っています」(研究企画部長・西澤(さいざわ)健(けん)先生)

探究学習で設定したテーマと、志望

先の学問がつながらない生徒も、探究学習でのプロセスを生かして自分の進路を切り拓いている。

「探究のテーマと志望先の学問の内容が一致していなくても、見事に合格を勝ち取った生徒を、これまでもたくさん見られました。そうした生徒に話を聞くと、面接官が探究のプロセスに関心を示すなど、生徒の学び方を大学が評価してくれたのではないかと感じます」(未来構想委員会副委員長・小岩(こいわ)淳(じゅん)子(こ)

探究学習を生徒のキャリア・進路観

全校を挙げての面接指導体制を構築

図3 面接指導で使用する個別指導評価票

評価項目	質問事項	評価	評価ポイント
志望理由	食及び食を取り巻く環境に興味・関心を持った理由は？本大学での学びをどう考えているか？	Ⓐ B C	具体性があるか？
自己PR力	何かPRしたいことがあるか？	Ⓐ B C	強い意志を感じるか？
論理性	全体を通して論理的に話しているか？	A Ⓑ C	説得力があるか？
課題解決への取り組み (食の安全・安心・環境との調和)	高校で頑張ったことは？	A Ⓑ C	課題を解決するためにどんなことに取り組んできたか？
地域・世界的な視点からの貢献	将来について	Ⓐ B C	社会貢献について具体的に考えているか？
自然科学の基礎知識	遺伝子組み換え、農作物の疫病などについて	Ⓐ B C	農業と食産業の違いを理解しているか？

※「4. 評価の方法」を参照して、評価をお願いいたします。

3. 生徒の反省(個別指導実施後、担当の先生からのアドバイスをもとに記入すること)
内容は最初の頃と比べて格段にレベルが上がった。あとは必死さを持ちつつ、楽しんで臨めるかどうか。

志望理由と自己PR力は多くの大学で評価される項目であるため、共通の評価項目として設定しているが、それ以外は、生徒が志望する大学のアドミッション・ポリシーに照らし合わせて、担当教師が評価項目を設定。評価項目を評価するための教師の質問を記入し、生徒の返答を3段階で評価する。

※学校資料を抜粋して記載。

教師のやりがいと持続可能性を両立させる

管理職による探究学習全体のマネジメントが重要

探究学習、そして総合型・学校推薦型選抜の指導・支援に、管理職を含む全教師がかかわる同校。探究学習のあり方、デザイン思考、総合型・学校推薦型選抜の指導に関する校内研修を実施することで、指導力の向上を図っている。早坂重行校長は、「全教師がかかわるからこそ、研修による底上げの次のステップとして、管理職のマネジメントが重要になる」と説明する。

「特に探究学習の指導・支援は、教師にとってやりがいが多い教育活動ですが、際限のないものでもあります。先生方の意欲を尊重しながら、『ここまで十分ですよ』と声をかけるためには、探究学習についての理論的な理解に基づいた、管理職によるマネジメントが不可欠です」

自ら「主体的に学び続ける」校長として、学術研究を続ける早坂校長（*）は、

大学と高校との交差点に立ちながら双方の視点で探究学習を俯瞰することがマネジメント上も重要だと考える。

「探究学習のゴールを設定し、適切に評価し、成果を発信・広報することが、管理職の責務だと思っています」

未来構想セミナーを通して「『自他のしあわせ』について考える経験は、大学入試という局面を乗り越えた後も、自分の人生を自律的に切り拓く力として残るはずだと、早坂校長は語る。『わくわくするか？』『新しいか？』『誰かの役に立つか？』という視点を大切にしながら『自他のしあわせ』を追究する生徒が、自分の持つ力の大きさに気づく機会をもっとつくりたいと思っています。1年次の先生方から『学校をどう変えるか？』とみんなが幸せになれるかを、LHRで考えさせたい』

といった案も出てきています。未来構想セミナーを含む様々な活動で生徒がデザイン思考を発揮できるよう、私たちも学校をデザインし続けます」

今回の実践事例の Point

- ✓ 生徒に「わくわくするか？」「新しいか？」「誰かの役に立つか？」を意識させることで、探究学習をより深まりのあるものにする。
- ✓ 教師が生徒の成長をつぶさに見取り、一人ひとりの長所を発見、認識させながら、生徒の探究学習に伴走する。
- ✓ すべての教師が探究学習、そして総合型・学校推薦型選抜の指導・支援にかかわれるよう、校内研修の充実と指導ツールの共有を図り、教師の指導力を向上させる。

*最新の研究成果に、「教師の自発的なメンタリングはどのようにして実現し、何によって促されるか？」（日本質的心理学会編『質的心理学研究』第22号）

新課程に関する情報は、『ハイスクールオンライン』でお届けします！

- ・2025年度大学入試の各大学の公表状況についてまとめた資料を公開！
- ・過去のオンラインセミナーのアーカイブ動画・資料などを掲載！

一問一答や課題を解決！実践につながる！

新課程レポート

ベネッセ教育情報センター

『ハイスクールオンライン』トップページ＞新課程への対応からアクセス

https://bhsso.benesse.ne.jp/hs_online/sidou/shinkatei/shidou/